



京都国立博物館

だより

KYOTO NATIONAL MUSEUM

2023 January to March vol. 217



新春特集展示

卯づくし

— 干支を愛でる —

特集展示

雛まつりと人形

親鸞聖人生誕八五〇年特別展

親鸞—生涯と名宝



二〇二三年

一・二・三月号



卯づくし

「干支を愛でる」

令和5年1月2日(月・休)～1月29日(日)

【平成知新館 1F-2】

二〇二三年の干支は卯(兔)です。長い耳と、ふわふわの毛並みを持つ兔は、とてもかわいい動物ですね。でも、実は昔の美術の中には、目つきが鋭い、あまり「かわいくない」兔も登場します。どうやら、昔の人と今の私たちでは、兔のイメージは少し違ったようです。



鈴軸双兔炉蓋 仁阿弥道八作 京都・正伝永源院



木賊花兔に段文様小袖 京都国立博物館

作品を見るのが楽しくなるワークシート(小学校低学年)

二〇二三年の「干支を愛でる」もファミリー向け!

やさしい解説文(小学校高学年)



月兔時絵象嵌盆 笠翁細工

月の兔

夜空に浮かぶ月の模様に、兔の姿を探したことがありますか? 「月には兔がすんでいる」というお話は、中国から日本に伝わりました。中国では、月の兔は不老不死の薬を作っていると信じられましたが、日本では、餅をついていると言われます。どちらにしても、兔と月はとても繋がりが強いものだと考えられたので、中国でも日本でも「月の中の兔」や「月を眺める兔」を描いた作品が、たくさん作られました。

兔と一緒に

兔は、「秋草」「波」「木賊(細長くてかわいい植物)」と一緒に描かれることもあります。どうして組み合わせられたのでしょうか? 実はこれらはすべて「月」と関係があるものです。一年の中で一番月が美しい「秋」と、月にいる「兔」が結びついて、「秋草と兔」が描かれるようになりまし。また、お能や和歌の中に、「波と月」「木賊と月」の組み合わせが登場するので、そこから「波と兔」「木賊と兔」の組み合わせが生まれました。「兔と言えば月、月と言えば……」と、連想ゲームのように想像が広がって、兔はいろいろなものと結びつけられて、描かれたのです。

この展示では、日本や中国の美術の中に表わされた、いろいろな兔をご紹介します。かわいいだけじゃない、兔の姿を探しに、ぜひ博物館に遊びに来てください。(水谷亜希)

3F-1 陶磁

【日本と東洋のやきもの】

1月2日(月・休)～2月26日(日)

3F-2 考古

【特別公開 熊本・宮崎の古墳文化 —石人と貝輪—】

1月2日(月・休)～2月26日(日)

2F-1 絵巻

【弘法大師空海の絵伝

生誕1250年を記念して

1月2日(月・休)～2月5日(日)

【時宗の祖師絵伝】

2月7日(火)～3月5日(日)

2F-2 仏画

【十二天屏風の世界】

1月2日(月・休)～2月5日(日)

【涅槃図】

2月7日(火)～3月5日(日)

2F-3 中世絵画

【中国の名勝—江南と西湖】

1月2日(月・休)～2月5日(日)

【中国の名勝—瀟湘八景】

2月7日(火)～3月5日(日)

2F-4 近世絵画

【京を描く—洛中洛外図屏風】

1月2日(月・休)～2月5日(日)

【京都の狩野派—狩野山楽】

2月7日(火)～3月5日(日)

2F-5 中国絵画

【南張北溟—中国近代の巨匠】

【特集展示】

雛まつりと人形

令和5年2月4日(土)～3月5日(日)

【平成知新館1F-2】



享保雛（大内雛） 京都国立博物館
犬張子・懸盤 入江波光コレクション・入江西一郎氏寄贈 京都国立博物館



衣裳人形 笛吹き若衆
入江波光コレクション・
入江西一郎氏寄贈
京都国立博物館



衣裳人形 お迎え人形
入江波光コレクション・入江西一郎氏寄贈 京都国立博物館

年中行事として定着している三月三日の雛まつりですが、人形を飾ってこの日を祝うようになったのは、江戸時代の初めとされています。雛まつりの起源のひとつとされる上巳の節供は、三月のはじめに行われる禊の行事でした。ここでは、日常生活の中で人間に似ていた穢れを移すために人形を用いました。それらは水に流すなどして捨てられるものでした。現代でも「流し雛」として目にする通りです。この習俗がやがて、子どもが遊びに用いる人形と結びつき、江戸時代には座敷に飾りつける豪華な雛人形や雛段へと発展したのです。

江戸時代の雛人形は、元号を冠して呼ばれる寛永雛・享保雛や、考案した人形師の名に由来するという次郎左衛門雛、江戸で誕生した古今雛、公家の装束を正しく写した有職雛など、特徴に応じて分類することができます。この特集陳列では、面差し、衣裳、寸法などに注目し、各種の雛人形の特徴を紹介します。

また人形は、私たちがフィギュアを身近に飾るように、座敷飾りとしても親しまれてきました。とりわけ人形の産地であった京都では、伏見人形・嵯峨人形・御所人形・賀茂人形・衣裳人形と各種の京人形が製作され、公家を中心に人々の生活空間に彩りを添えていました。本年はこの中から、衣裳人形を中心に展示します。衣裳人形とは、美しいものを身に着けた、市井の風俗を映す人形。これらの人形を遊びと旅の場面に見立てて展示し、人形に託して、私たちの願う感染症の収束した世界をご覧いただきます。

ひと足早い春の訪れを、博物館の雛まつりで感じてください。

(山川 曉)

【ミュージアムパートナー一覧】 ※令和4年12月末現在
京都国立博物館の賛助会員制度です。当館の活動について幅広くご支援いただいています。

「ゴールド」土屋 和之

株式会社 のびのびホールディングス

株式会社 俄 / ZSSエプ株式会社

「シルバー」 有限会社 竹内美術店

学校法人 二本松学院

「ブロンズ」 原田清朗

【キャンパスメンバーズ】

※令和4年12月末現在

「京都国立博物館キャンパスメンバーズ」は、国立博物館と大学等との連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する会員制度です。会員である大学や専修学校の学生および職員は、当館名品ギャラリーを無料で観覧いただける機会などさまざまな特典を提供しています。

学校法人 瓜生山学園 / 追手門学院大学

国立大学法人 大阪大学 / 大阪大谷大学 /

大谷大学 / 学校法人 大手前学園

学校法人 関西大学 / 学校法人 関西学院 /

国立大学法人 京都大学 /

学校法人 京都外国語大学 /

国立大学法人 京都工芸繊維大学 /

学校法人 京都産業大学 /

学校法人 京都女子学園 / 京都市立芸術大学 /

京都精華大学 / 京都先端科学大学 / 京都橘大学 /

京都府立大学 / 近畿大学 /

国立大学法人 滋賀大学 / 四天王寺大学 /

就実大学 / 成安造形大学 / 学校法人 大覚寺学園 /

帝塚山大学 / 学校法人 同志社 /

奈良大学 / 奈良女子大学 /

国立大学法人 奈良先端科学技術大学院大学 /

学校法人 二本松学院 / 花園大学 / 佛教大学 /

学校法人 立命館 / 観谷大学

【寄附】

京都国立博物館では文化財とそれを守り伝えてきた先人の想いを次の1000年へ繋いでいくため、広く寄附を募っております。このたび、左記の方より寄附をいただきました。寄附の趣旨を踏まえ、大切に活用させていただきます。

中川 和子 様

「河内長野の霊地 観心寺と金剛寺―真言密教と南朝の遺産―」観覧記

奈良大学准教授 大河内智之

平安時代初期、空海弟子の実恵と真紹が開き如意輪観音坐像（国宝）を本尊とする観心寺、そして平安時代の末に高野山から阿観が入寺し、先般平成知新館でも展示されその威容を誇った丈六の大日如来坐像（国宝）を本尊とする金剛寺。ともに歴史的にも文化的にも地理的にも高野山との深い結びつきを有した古刹です。

展示の冒頭、来館者は心の準備も整わぬままに、金剛寺に伝わる弘法大師の大幅にまみえます。高野山壇上伽藍御影堂に奉懸された、真如親王親筆とされる大師の影像から二度目の転写本とされる由緒正しき尊影で、現在確認されているなかで最古の大師像です。副題のとおり、真言密教の聖地に伝わる宝物への出会いを予見させる効果的なアプローチから展示室を進むと、さまざまな密教尊像を描いた仏画、多様な密教法具、根来寺等で書写された聖教類が展示室に並びます。彫刻では観心寺の伝宝生如来坐像と伝弥勒菩薩坐像（及び参考出陳の安祥寺大日如来坐像）と、それら平安初期密教彫像への学習のもと造像された平安時代末期の奈良仏師による金剛寺大日如来坐像（多宝塔本尊）が向き合っって展示された空間に驚かされます。これら資料の並びには、真言密教の伝播と継承のあり方を伝えようとする意図が通底しており、まさしく二つの真言寺院の霊宝が一堂に会したことで、こうした魅力的な展示空間が構築されたといえるでしょう。

展示会を構成する上において、同格の複数寺院を対象とするのは、実は難しいことです。それぞれの寺の歴史があり、宝物の由来があり、伝統の重みがありますから、どちらか一方に偏らず、かつ足りないことのないよう、担当者頭を悩ませることになります。その点で、真言密教と南朝遺産という両寺を架構するテーマを設定し、かつ両寺の文化財を分かつずに分野ごとに

紹介した展示方法は、同館展示室の特性も踏まえた適切な解答の一つであったと思われまます。観心寺からの出陳が六十六件、金剛寺からの出陳が六十三件。隅々まで配慮し練られた展示であることが、こうした視点からもうかがえます。

このように練られた展示の中で、特に注目されたのが、同館による調査で新たに見いだされた美術工芸資料の数々です。本展自体、平成二十八年度から令和元年度まで科学研究費助成事業として実施した「河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究」の成果報告を兼ねており、同館からは「社寺調査報告」三冊、科学研究費補助金の二冊の報告書が発行されています。以前から「京都社寺調査」というかたちで、多くの館員が一丸となり専門性を生かした調査活動を行ってきた京都国立博物館の伝統があつてなした事業と評価できます。

中でも、観心寺の大壇具や、法橋榮賢筆の紅顔梨阿弥陀像など、従来国立館では展示される機会が少なかった江戸時代の宗教美術資料を高く評価していたことに、大きな共感を覚えました。日本美術史の枠組みと射程を、より大きくより長くとらえるためには、旧来の評価にとどまらない新たな価値を資料から見出していく必要があります。それはまさしく調査の現場で研究員が悩みながら評価し、知識と経験を蓄え、展示という場を通じて観覧者と価値を共有していく中で、構築されていくものと思います。

多分野にわたる研究者を擁する国立博物館としての社会的責務を果たすという観点からも、今後も同様の調査研究活動を続けられ、またその成果としての展示会が引き続き開催されますことを、京博の展示会に多くのことを教わってきた一人の学徒として、また熱烈なファンとして強く望んでいます。

